

若者の農業・農産物への意識調査
—農業体験・学習への取り組みの重要性—

井田 雅恵・藤井わか子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第49号抜刷）

報告・資料

若者の農業・農産物への意識調査 — 農業体験・学習への取り組みの重要性 —

Research on the consciousness that young people possess regarding agriculture and its products
— The importance of their experience and study involved in the practice of farming —

井田雅恵・藤井わか子

【はじめに】

農業とは、生命の維持を基本とする食料を生産する重要な産業である。今や農業技術の飛躍的な進歩により、季節を限定することなく農産物の生産、出荷が可能となった。しかし、農業の歴史を遡ると、自分達家族の食料をまかなう程度を栽培し「作って食べて余ったら分けてあげる」ことが本来の営みであった。それが次第に貢ぐものになり、売るものとなり、産業化した¹⁾。

岡山県の農業においては、米作のみならず果樹、工芸作物（葉たばこ、茶など）など多彩な農産物の生産が展開し、果樹王国などと呼ばれるほど飛躍的に発展した。しかし、近年では、産業構造の変化の中で相対的に縮小傾向を強めてきており、兼業化の進展と農業構造の弱体化、さらに農村社会の混住化と過疎化・高齢化が進んでいる²⁾。併せて、様々な要因により農業の将来に展望が見えない等の理由から若者の担い手不足が深刻化していると言われている。

また、経済成長の発展とともに、核家族化、女性の社会進出、単身世帯の増加を背景に中食（加工品、弁当など）、外食（ファーストフード、レストランなど）といった「食の外部化」が進み、食生活においても大きな変化を遂げた。あり余る食べ物がある中で、安さ・早さ・便利さ・見た目のよさを良いとする価値観を生み出し、本来の農産物の味や良さ、生産方法などが分かりにくくなってきている。また、飛行機や自動

車の絵は上手に描けるが豚や鶏を正しく描けない子供も少なくないと言われている³⁾。食意識についても、20代の若者において、ふだん欠食習慣のある者の割合が高く、必要な栄養素を食事から摂れていないと自覚している者の割合も高い⁴⁾。このことは、栄養不足を自覚しているながら食事内容に偏りがあるといったことが想像される。その半面、ダイエット志向のあまりに不足している栄養素を食物からではなく健康食品や栄養補助食品から補おうとする人が増えている⁵⁾。

そのような中で、食への見直しが図られるとともに、食と農を一つの枠組みとして地産地消の運動が全国で取り組まれている。岡山県下では、生産者と消費者の相互理解を深め、安全で安心な農産物の安定供給と消費拡大を図ることを推進しようとする運動が行われている⁶⁾。そこで、著者は、平成13、14年度に津山市の農業後継者協議会と農業改良普及センターが主催した農業体験事業に学生と共に参加した。将来を通じて自分と家族、子ども達の食生活を担う若者を対象に、農業・農作物の大切さを学ぶことを通じ、食への関心を高め、食生活への意識の向上を目的として農業体験・学習をすることの大切さを感じた。そこで、今後も農業・農作物の大切さを多くの若者に理解してもらうため、体験事業を進めていく上で、学生の農業に関する意識を調査することを計画した。

本研究では、次世代を担う若者の育った環境、過去の農作業経験の有無が農業・農作物への意識にどのような影響を与えているのか、農業体験・学習への参加

意欲にどのような影響を及ぼすのか、また、若者と農業従事者との農業・農産物への意識がどのように違うのかを把握し、今後どのように農業体験・学習に取り組んでいく必要があるのかを検討した。

【方 法】

平成15年7月に学生と農業従事者を対象にアンケート調査を行った。学生は、美作大学生生活科学部（食物・児童・福祉建築デザイン学科）および短期大学部（栄養・幼児教育学科）の学生706名（男子51名、女子655名）を対象に実施し、回収率は92%で、有効なデータとして637名を採用した。農業従事者は、津山市・鏡野町・久米町・旭町・中央町・勝央町で、20～60歳までの農業従事者20名（男性17名、女性3名）を対象に実施し、回収率100%だった。調査内容は、学生には、農業体験・学習の参加意欲、食意識や農業・農産物のイメージ、農業従事者への期待等について調査した。農業従事者には、学生と同様に食意識や農業・農産物のイメージについて、逆に若者への期待等について調査した。Excelで集計し、 χ^2 検定で解析した。

【結果及び考察】

1. 学生の出身地別の農家・非農家、農作業経験の有無の実態

出身地別に家が農家かどうか（以下、農家・非農家という）の比率を図1に示した。農家の人は全体の72.2%で、非農家の人は27.8%である。中国、四国、東日本の地区出身者の7割程度が農家である。これに対して、九州・沖縄地区出身者は約5割と低い。これは、この地区は沖縄地区出身者が7割を占めており、沖縄地区はサービス業を中心とする第三次産業の比重が高い⁷⁾といった特徴があることが影響していると考えられる。

出身地別に過去に農作物を育てた経験（家庭菜園を含む）があるかどうか（以下、農作業経験の有無という）の比率を図2に示した。農作業経験のある人は全体の66.6%で、中国、四国、九州・沖縄、東日本の地区とでは地域による大きな差が見られなかった。

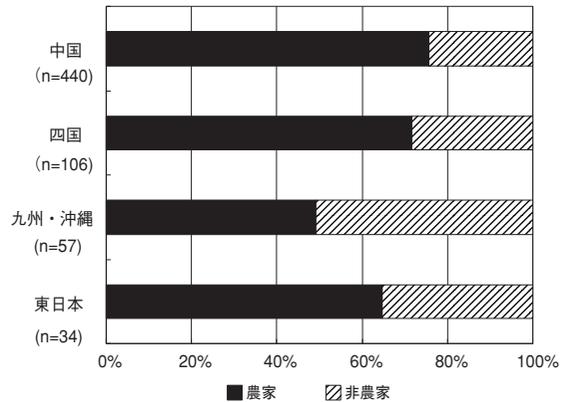


図1 出身地別農家・非農家の割合

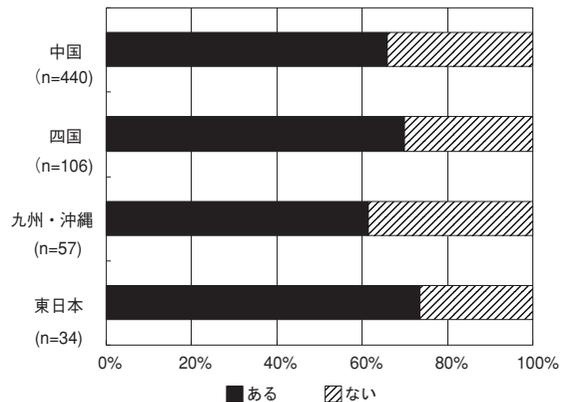


図2 出身地別農作業経験の有無の割合

表1に、農家・非農家、農作業経験の有無と農業体験・学習への参加意欲との関係を示した。それぞれ χ^2 検定を行った。農業体験・学習を希望する人は全体の38.1%で、希望しない人は15.2%、はっきりと判断がつかないどちらともいえないが46.6%と半数である。農家・非農家での有意差は見られず、農家の人が農業体験・学習を必ずしも希望しているとは限らない。農作業経験の有無では $p<0.01$ %で、農作物を育てた経験がある人ほど農業体験・学習への参加を希望する人が増える傾向が見られた。

次に、初めて農作業を経験した時期とその回数を表2に示した。初めて経験した時期とは、各々が最も早い年齢で農作物を育てた時期を表している。経験した回数とは、同時期、または複数の時期でも一種類の農

表1. 農家・非農家，農作業経験の有無と農業体験・学習への参加意欲との関係

質問項目	カテゴリー	全体 (n=637)	家が農家かどうか		χ^2 検定	農作業経験の有無		χ^2 検定
			農家 (n=460)	非農家 (n=177)		経験ある (n=424)	経験ない (n=213)	
農業体験・学習への 参加希望の有無	希望する (n=243)	38.1	36.3	42.9		43.2	28.2	
	どちらでもない (n=297)	46.6	48.7	41.2	n.s	42.7	54.5	**
	希望しない (n=97)	15.2	15.0	15.8		14.2	17.4	

注) **: $p < 0.01$, n.s: 有意差なし

作物を育てた経験を1回として表している。農業体験・学習への参加希望の有無と初めて農作業を経験した時期と経験した回数との関係は見られなかった。初めて農作業を経験した時期については、小学生の時が全体の76.8%を占め、幼稚園，大学生，高校生，中学生の順に減っていた。経験した回数については、67.8%の人が1～2回経験していた。小学生の時が多くなったのは、「総合的な学習の時間」が導入される

以前より，特に小学校では，理科や家庭科等の授業の一環として農作物を育てることが多く行われてきたためと考えられる。農業体験・学習への参加意欲には，農作業経験のある人の中では幼児期からの農作業を経験した時期や回数の多さとの関係は見られなかった。農作業経験の有無で比較すると，経験がある人の方に農業体験・学習への参加意欲が見られた。

表2. 農作業初経験時期，回数と学生の農業体験・学習への参加希望の有無との関係

質問項目	カテゴリー	全体 (n=420)	初めて経験した時期					χ^2 検定	経験した回数			χ^2 検定
			保育・幼稚園児 (n=44)	小学生 (n=318)	中学生 (n=12)	高校生 (n=17)	大学生 (n=29)		1～2回 (n=286)	3～4回 (n=108)	5～9回 (n=26)	
農業体験・学習への 参加希望の有無	希望する (n=184)	43.8	45.5	43.4	25.0	47.1	51.7		42.7	46.3	46.2	
	どちらでもない (n=179)	42.6	40.9	42.1	66.7	41.2	41.4	n.s	43.7	42.6	30.8	n.s
	希望しない (n=57)	13.6	13.6	14.5	8.3	11.8	6.9		13.6	11.1	23.1	

注) n.s: 有意差なし

また，農作業の経験者が，いつ，何を育てたか見たところ（図3），保育・幼稚園児ではさつまいもを育てた経験者が多かった。小学生では，トマト，さつまいもを育てた経験者が多かった。中学生，高校生，大学生では，トマト，米を育てた経験者が多かった。保育・幼稚園児でさつまいもを育てた経験者が多かったのは，季節感を感じる行事としても掘り遠足等を行う施設が多いことや，さつまいもは幼児の力でも比較的引っぱり張って収穫することができるためと考えられ

る。小学生，中学生，高校生，大学生の時期のいずれにおいてもトマトが多かったのは，比較的手軽に作れるためだと想像される。米については，農家等に依頼して作ることが多いことから，地域との交流が想像される。

以上のことから，初めて農作業を経験した時期と回数に関わらず実際に農作業を経験することが農業体験・学習への参加意欲に影響すると考えられる。

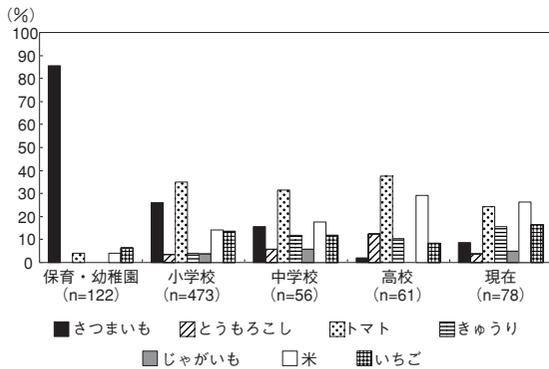


図3 農作業経験の時期、農産物

2. 学生の農業、食に関する意識

農業・食に関する知識、意識について表3に示した。農家・非農家、農作業経験の有無、農業体験・学習への参加希望の有無とそれぞれの項目との関係を見た。旬を意識して農産物を購入する人は、24.2%と低い。また、農家・非農家との関係は有意差が認められたが、はっきりとした関係が見られなかった ($p < 0.01$)。しかし、農作業経験がある人ほど旬を意識しており

($p < 0.01$)、農業体験・学習を希望する人ほど意識している ($p < 0.01$) といった結果が得られ、家が農家であるといった環境よりも実際に農産物を育てた経験があることの方が影響を及ぼすようである。また、農業体験・学習を希望する人は、体験・学習の内容につながる農産物の旬についても興味・関心を持っていると考えられる。

調査地区である岡山産のピーナーの生産量について全国1位であることを知っている人は半数程度で、農家の人ほど知っている傾向が見られた ($p < 0.05$)。これは、農家の人の57.0%が岡山県出身者であるためと考えられる。また、岡山産を意識して農産物を購入する人は5.8%とかなり少ない。しかし、“地元で作ったものを地元で消費する”という「地産地消」の言葉を47.3%の人は知っており、農作業経験がある人ほど ($p < 0.01$)、農業体験・学習を希望する人ほど知っている傾向が見られた ($p < 0.05$)。このことから、「地産地消」を知識として知っているが、特に地域で生産されたものを意識して食べている人が少ないことが分かった。

表3. 学生の農業・食に関する知識、意識

質問項目	カテゴリー	全体 (n=637)	家が農家かどうか		χ^2 検定	農作業経験の有無		χ^2 検定	農業体験・学習への参加希望の有無		
			農家 (n=459)	非農家 (n=178)		経験ある (n=424)	経験ない (n=213)		希望する (n=243)	どちらでもない (n=297)	希望しない (n=97)
旬を 気にするか	気にする	24.2	23.5	25.8		28.8	15.0		32.9	15.5	28.9
	どちらでもない	37.8	41.4	28.7	**	35.8	41.8	**	30.9	46.1	29.9
	気にしない	38.0	35.1	45.5		35.4	43.2		36.2	38.4	41.2
ピーナーの 生産量1位を 知っているか	知っている	47.1	49.7	40.4		49.8	41.8		44.4	48.5	49.5
	知らない	46.0	42.5	55.1	*	44.1	49.8	n.s	50.6	42.1	46.4
岡山産を 意識するか	意識する	5.8	5.4	6.7		7.1	3.3		9.1	3.0	6.2
	どちらでもない	25.7	27.2	21.9	n.s	24.8	27.7	n.s	24.3	27.3	24.7
地産地消を 知っているか	意識しない	68.4	67.3	71.3		68.2	69.0		66.7	69.7	69.1
	知っている	47.3	47.1	47.8		52.4	37.1		55.6	41.1	45.4
TV情報を 信じるか	どちらでもない	5.0	4.5	6.1	n.s	5.4	4.2	**	5.8	5.4	2.1
	知らない	47.7	48.4	46.1		42.2	58.7		38.7	53.5	52.6
食事の支度 をする頻度	信じる	78.8	78.9	78.7		80.7	75.1		84.8	77.1	69.1
	どちらでもない	17.0	17.6	15.2	n.s	14.6	21.6	n.s	10.7	19.2	25.8
食べ残し する頻度	信じない	4.2	3.5	6.1		4.7	3.3		4.5	3.7	5.2
	する	46.8	46.2	48.3		50.2	39.9		53.1	43.8	40.2
食べ残し する頻度	したりしなかったり	31.6	31.6	31.5	n.s	30.4	33.8	*	31.7	32.7	27.8
	しない	21.7	22.2	20.2		19.3	26.3		15.2	23.6	32.0
食べ残し する頻度	食べ残ししない	77.7	77.3	78.7		78.3	76.5		84.4	73.4	74.2
	どちらでもない	14.3	14.6	13.5	n.s	13.2	16.4	n.s	7.8	19.2	15.5
	食べ残しする	8.0	8.1	7.8		8.5	7.0		7.8	7.4	10.3

注) *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, n.s: 有意差なし

食に関しては、連日のように料理や食品についての情報がテレビで放送されている。これらの情報を信じる人が77.7%と高い値になった。さらに、農業体験・学習を希望する人ほど信じている傾向がみられた ($p<0.05$)。テレビの情報を信じやすいということは、間違っただけの情報を信じる恐れがあり、テレビ等の情報により食品を選択し行動していると想像できる。

食事の支度については5割程度の人が支度するようであるが、農作業経験がある人ほど頻度が高く ($p<0.05$)、農業体験・学習を希望する人ほど高かった ($p<0.05$)。また、学生の住まいの形態からみると、実家、アパート・下宿に住んでいる人が9割で、設備が整っていて自炊できないことはないはずであるが、食事の支度の頻度は予想よりも低かった。頻度が低いということは、農産物を直接見たり触れたりする機会が少ないのではないかと考えられる。

食べ残しについては、食べ残しをしない人が8割程度と多く、農業体験・学習を希望する人ほど食べ残しをしていない ($p<0.01$)。食べ残しをしない理由としては、もったいないから、出されたものは食べる主義であることが最も多かったことから、食べ物を大切にすることは高いようである。

次に、農作物の摂食頻度について図4に示した。農作物の種類については、平成13年度国民栄養調査結果において20歳代の平均摂取量が他の年齢層に比べて少ない傾向を示すものを採用した⁸⁾。特に、いも類については、摂食頻度は低いと思われるさつまいも、山芋を取り上げた。葉菜類を意識してよく食べる人が48.2%、根菜類が33.6%、豆が3.1%、さつまいも、山芋が2%程度と意識して食べる人が少ない結果が得られ、農産物の摂食頻度は低いことが分かった。野菜としては、葉菜類よりも根菜類を意識して食べている頻度が低い。葉菜類の頻度の方が高かったのは、他の農産物よりも生で食することができるものが多いことと調理しやすいためと考えられる。農家・非農家、農作業経験の有無、農業体験・学習への参加希望の有無との関係について有意差は見られなかった。

次に、食べる際に何に気を付けているのか複数回答

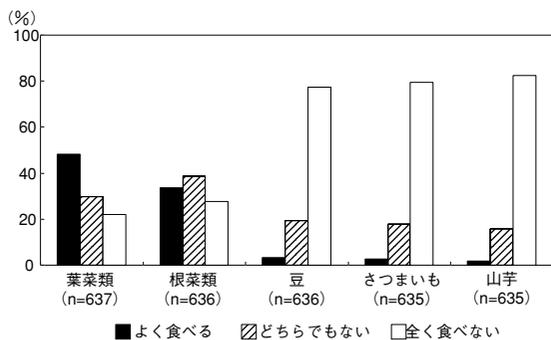


図4 学生の農作物に対する摂食頻度

で聞いた結果を図5に示した。「1日3回食べる」が54.2%、「いただきます」を言うが50.6%で半数が意識しており、「適切な量を食べる」が42.6%、「栄養のバランスに気をつける」が39.3%で40%前後の学生が意識していた。「決まった時間に食事をする」が14.6%、「間食をしない」が17.8%と少ない。このことは、実際には健康的な食事をしているとは考えにくい結果である。

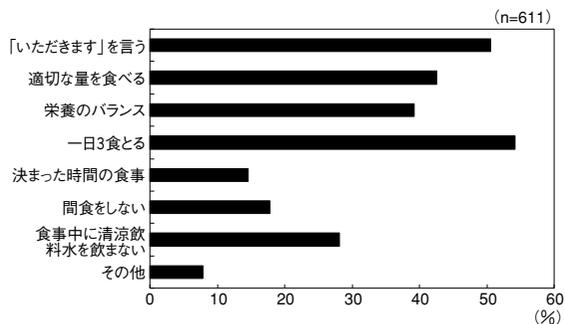


図5 学生が食事時に気を付けていること (複数回答)

3. 学生、農業従事者における食に関する意識の違い
対象の農業従事者は、半数の人が米を生産・出荷しており、次いで野菜 (30.0%)、果樹 (20.0%)、肉用牛 (15.0%)、酪農 (5.0%) を生産・出荷している。年齢は32.5±10.4歳である。学生と農業従事者においてどのような意識の違いがあるのかを見た。

野菜の入手先について図6に示した。学生は、「スーパーマーケット等で買う」が65.9%と最も多く、次い

で「家で作ったもの」をもらうが23.3%である。青空市場の利用者は4.8%と少なかった。農業従事者については、「家で作ったもの」を使うが84.2%と最も多く、意外に「スーパーマーケット等で買う」も63.2%と多い。青空市場は31.6%利用している。これは、摂取している野菜を全て作っていないか、自分達が作ったものだけで生活しているわけではなく、農業従事者の家庭でも多種多様のものを摂取していると考えられる。

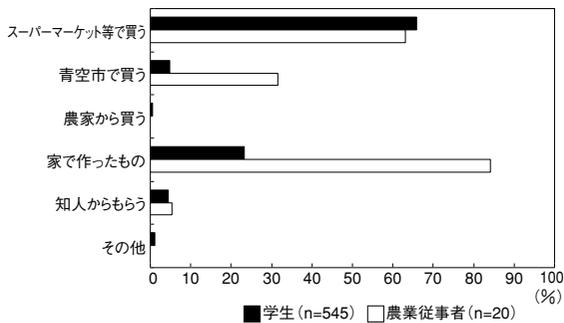


図6 学生、農業従事者における野菜の入手先 (複数回答)

「食べる」行為の意味について図7に示した。複数回答で聞いてみたところ、学生、農業従事者共に「健康の維持」「命の源」といった食べる行為を大切なものという意識が高かった。さらに、農業従事者においては、「コミュニケーションをはかる」といった栄養の補給、命の源といった食の本質とは異なる機能を果たすものとしての意識が学生よりも高かった。それに比べて、学生は「空腹をいやす」「ストレス解消」といった意識が農業従事者よりも高く、学生の食意識の低さが感じられる。

4. 学生、農業従事者における農業・農家のイメージ

学生、農業従事者における農業のイメージにどのような違いがあるのかをみるために、SD法を用いた(図8)。それぞれについてt検定で解析した。学生と農業従事者の農業のイメージでは、「暗い～明るい」(p<0.05)「閉鎖的～開放的」(p<0.01)「つらい～楽しい」(p<0.01)「重労働である～重労働ではない」(p<0.05)「地味な仕事である～地味な仕事ではない」

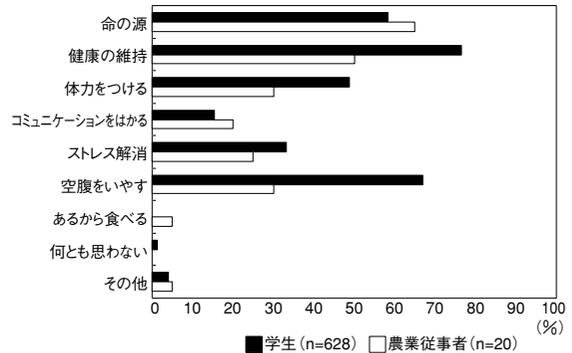


図7 学生、農業従事者における「食べる」行為の意味 (複数回答)

(p<0.01)「生きがいがある～生きがいがない」(p<0.01)で有意差が見られた。学生は、農業従事者よりも「つらい」「重労働である」「生きがいがない」といった肉体的労働のイメージを抱く反面、「明るい」「開放的」「地味な仕事ではない」といった明るい良いイメージを抱く傾向が見られた。農業従事者は、学生よりも一般的に言われている暗いイメージを抱く傾向があるが、仕事に「生きがいがある」といったイメージも抱いている。以上のことから、農業従事者の方が一般的に言われている暗いイメージを抱く傾向が見られるが、仕事としての「生きがい」を感じており、仕事での原動力になっているのではないかと考えられる。学生は農業を良いイメージとして捉えている傾向があることから、農業従事者に比べて農業の実体や仕事の内容を十分に理解しておらず、もしくは農業に対する意識が希薄であると想像される。

そこで、学生の農家・非農家、農作業経験の有無、農業体験・学習への参加希望の有無と農業のイメージとの関係を見た(図9, 10, 11)。農家・非農家との関係では、「つらい～楽しい」(p<0.01)「重労働である～重労働ではない」(p<0.05)で有意差が見られた。非農家の人ほど、農家の人よりも「つらい」「重労働である」といった肉体的労働のイメージを抱いている。農作業経験の有無との関係では、「暗い～明るい」(p<0.05)「重労働である～重労働ではない」(p<0.01)「健康的な仕事である～健康的な仕事ではない」

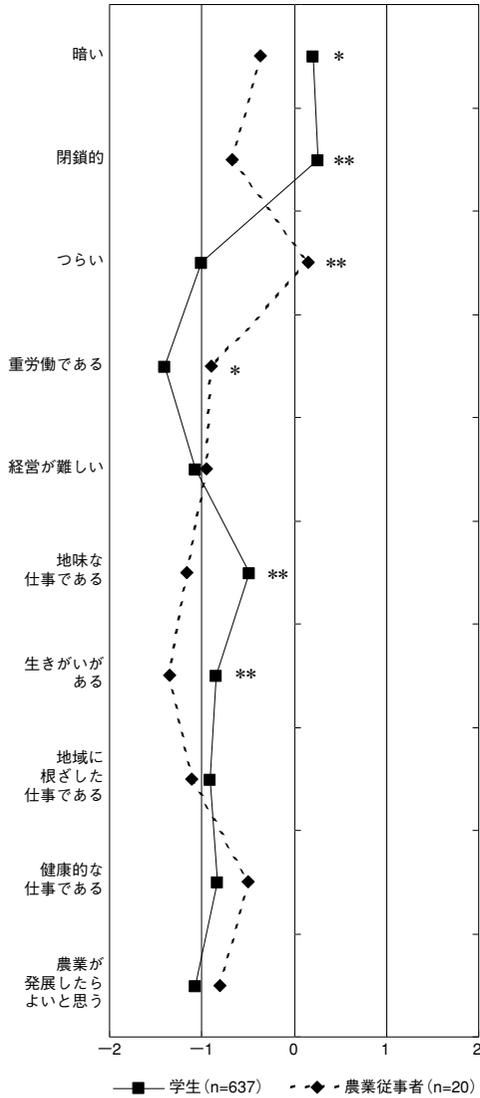


図8 学生、農業従事者の農業のイメージ
*:p<0.05, **:p<0.01

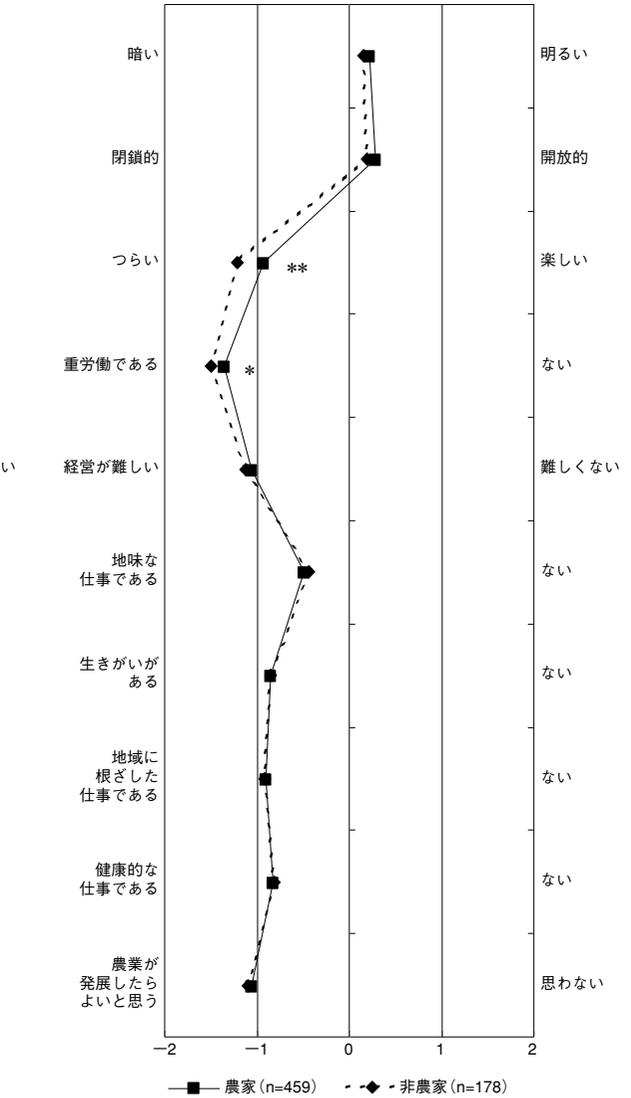


図9 学生の農家・非農家による農業のイメージ
*:p<0.05, **:p<0.01

($p<0.05$)「農業が発展したらよいと思う～農業が発展したらよいと思わない」($p<0.01$)で有意差が見られた。農作業経験がある人ほど、経験がない人よりも「重労働である」という大変なイメージを抱いている反面、「明るい」「健康的な仕事である」「農業分野が発展したらよいと思う」といった前向きなイメージを抱いている。農業のイメージは、育った環境である農家かどうかに関わらず、実際に農作業を経験すること

により、大変さを感じるだけでなく前向きな良いイメージを抱く傾向があると考えられる。また、農業体験・学習への参加希望の有無との関係では、「暗い～明るい」($p<0.01$)「閉鎖的～開放的」($p<0.01$)「つらい～楽しい」($p<0.01$)「地味な仕事である～地味な仕事ではない」($p<0.01$)「生きがいがある～生きがいがない」($p<0.05$)「農業が発展したらよいと思う～農業が発展したらよいと思わない」($p<0.01$)で有意差

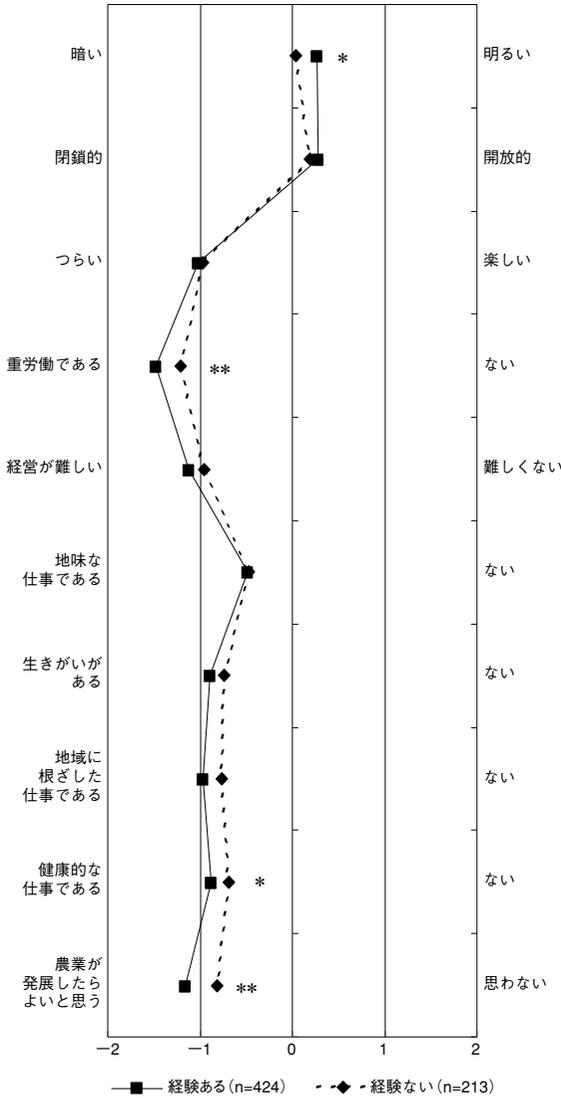


図10 学生の農作業経験の有無による農業のイメージ
* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$

が見られた。希望する人は、希望しない人よりも「明るい」「開放的」「楽しい」「地味な仕事ではない」「生きがいがある」「農業が発展したらよいと思う」といった明るい良いイメージを抱いており、希望しない人ほど暗い大変な仕事だというイメージを抱いている。

農業のイメージは、農業従事者と家が農家である学生は暗い、つらいイメージを抱いているが、農作業を経験した学生は大変さを感じるだけでなく前向きな良

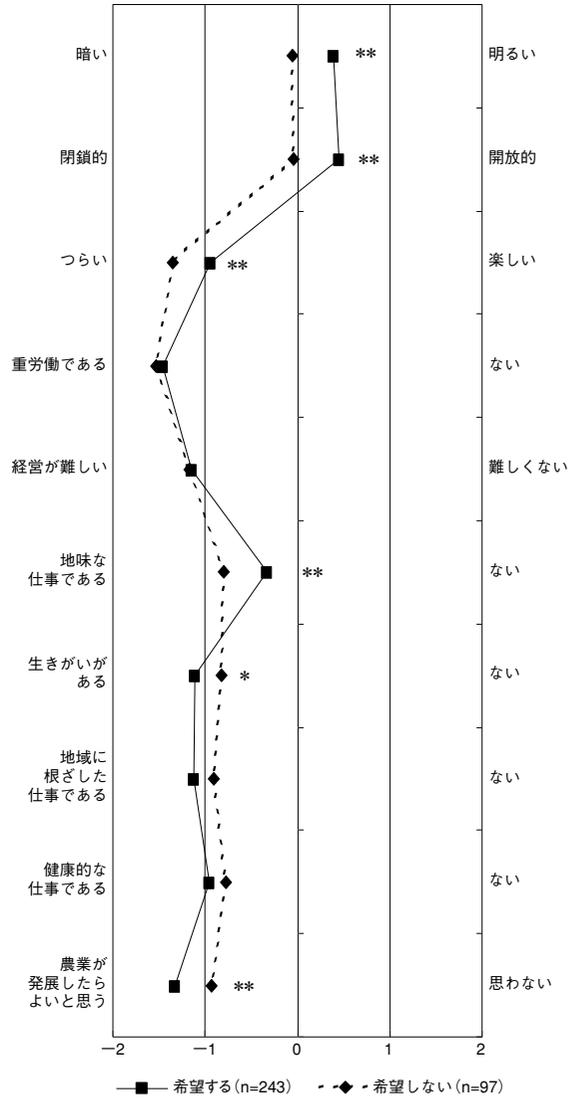


図11 学生の農業体験・学習への参加希望の有無による農業のイメージ
* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$

いイメージを抱く傾向があると考えられる。

5. 学生と農業従事者が互いに期待すること

学生が農業従事者に期待しているのかを表4に示した。全体としては、期待する人が52.9%、どちらでもないが45.2%、期待していないが1.9%である。農家・非農家、農作業経験の有無、農業体験・学習への参加希望の有無との関係をみたところ、農家・非農家との

表4. 農家・非農家、農作業経験の有無、農業体験・学習への参加希望の有無と農業従事者への期待との関係

質問項目	カテゴリー	単位：%										
		全体 (n=637)	家が農家かどうか 農家 (n=459) 非農家 (n=178)		χ ² 検定 農作業経験の有無 経験ある (n=424) 経験ない (n=213)		農業体験・学習への参加希望の有無 希望する (n=243) どちらでもない (n=297) 希望しない (n=97)			χ ² 検定		
農業従事者に期待しているか	期待している (n=337)	52.9	52.3	54.5		58.7	41.3		74.9	37.7	44.3	
	どちらでもない (n=288)	45.2	46.0	43.3	n.s	39.4	56.8	**	23.5	61.6	49.5	**
	期待していない (n=12)	1.9	1.7	2.2		1.9	1.9		1.6	0.7	6.2	

注) * : p<0.05, ** : p<0.01, n.s : 有意差なし

関係はみられなかったが、農作業経験がある人ほど、農業体験・学習への参加を希望する人ほど期待する傾向が見られた (p<0.01)。学生の家が農家・非農家と農業従事者への期待との関係は見られなかったが、家が農家であることは農業への関心を高める直接の要因にはなっていないと考えられる。

そこで、学生が農業従事者にどのようなことを期待しているのかを見たところ、「安心・安全なものの生産」が89.6%と最も多く、次いで、「新鮮なものの生産」が76.5%、「おいしいものの生産」が75.2%、「体に良いものの生産」が62.7%である (図12)。これに対して、農業従事者が若者にどのようなことを期待しているのかを図13に示した。「安心・安全性に着目してほしい」が45.0%と最も多く、次いで「農作物の旬や季節感に着目してほしい」が30.0%、「おいしさに着目してほしい」が25.0%である。学生も農業従事者も農産物の安心・安全性に関心が高い。このことは、近年、輸入農産物の増加や、残留農薬、無許可添加物の使用、遺伝子組み換え食品の増加等多数の問題が取り上げられている⁹⁾ことが影響していると考えられる。また、学生は新鮮でおいしい農産物の生産を期待しているのに対して、農業従事者の方は農産物の旬や季節感のあるものに着目してほしいと期待しており、相互の期待することにすれ違いが見られる。これは、学生が積極的に農業体験に参加することで農産物の季節感を知り感じ、農業従事者側は新鮮な農産物を直売等の方法でアプローチすることで解決できるのではないかと考えられる。

反対に、学生が農業従事者に期待していない理由を

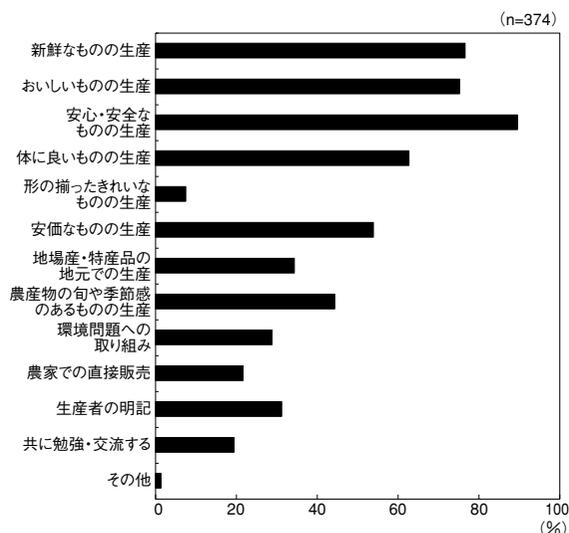


図12 学生が農業従事者に期待すること (複数回答)

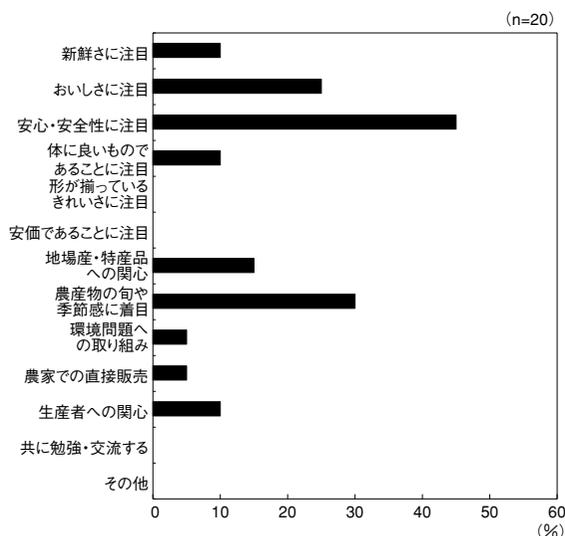


図13 農業従事者が若者に期待すること (複数回答)

図14に示した。「興味・関心がない」が66.7%と最も多いが、「家が農家だから（だったから）」期待しない人が16.7%である。農業や農産物への関心が低いことが分かった。

農業従事者に期待している学生と農業従事者は、農産物への安心・安全性に関心が高いため、今後、農業体験・学習を計画していくことで農業・農産物の大切さを伝えていけるのではないかと考えられる。但し、農業従事者に期待していない、農業に興味・関心がない人については、農産物への安心・安全性を知るためにも、特に力を入れて農業体験・活動への参加を啓発していきたい。

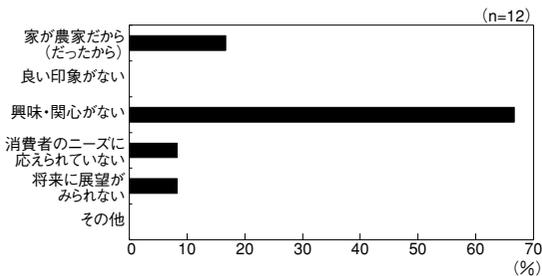


図14 学生が農業従事者に期待していない理由

6. 学生、農業従事者における農業体験・学習の取り組みへの関心

学生の農業体験・学習への参加を希望する人がどのような理由で参加を希望するのかを図15に示した。

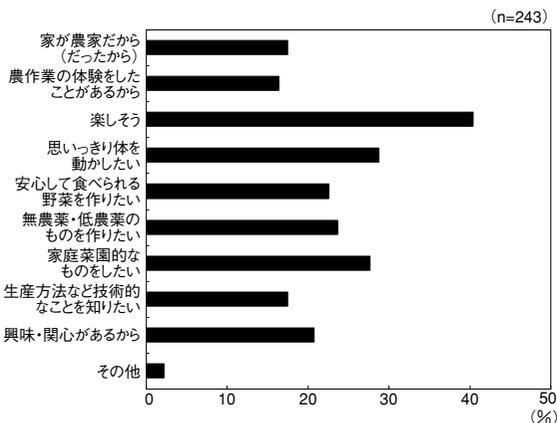


図15 学生が農業体験・学習を希望する理由 (複数回答)

「楽しそう」が40.4%と最も多く、「思い切り体を動かしたい」が28.7%、「家庭菜園的なものを作りたい」が27.6%である。農業体験・学習は楽しそうだという気軽な気持ちで参加を希望していることが分かった。

反対に、どのような理由で参加を希望しないのかを図16に示した。「家が農業をされていて大変さがわかるから」が35.1%で最も多く、「興味・関心がない」が25.8%、「重労働」22.7%である。参加を希望しない理由は、家が農家で農業の大変さを分かっていること、また、農業に対して無関心であることが考えられる。

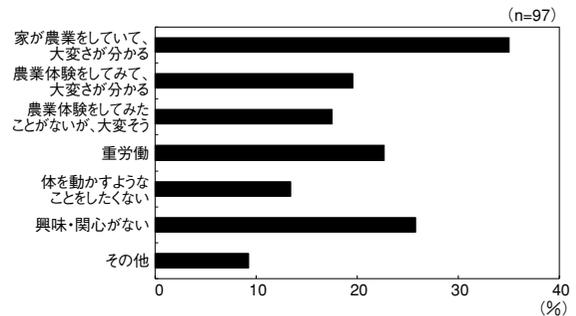


図16 学生が農業体験・学習を希望しない理由 (複数回答)

農業従事者が、農業体験・学習への取り組みについてどのように考えているのかを図17, 18に示した。取り組んでみたいと思う人が73.7%と多かった。取り組んでみたいと思う理由は、「農業の楽しさ・良さを伝えたい」が41.2%、「農産物の生産の仕方を教えたい、知ってほしい」が35.3%と多かった。このように、農業従事者も農業体験・学習への関心があると考えられる。

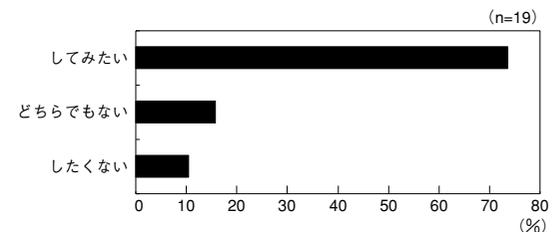


図17 農業従事者における農業体験・学習への取り組み

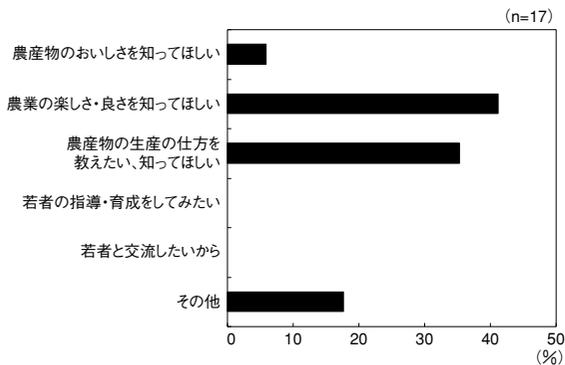


図18 農業従事者における
農業体験・学習を取り組みたい理由

以上のことから、学生については、農業体験・学習を希望する人ほど「楽しそう」といった気軽な気持ちで希望している。希望していない人は、重労働、家が農家で農業の大変さが分かることから敬遠しており、また無関心であることが分かった。農業体験・学習において、農業の大変さだけでなく、農作物を育てることの楽しさや達成感、喜びを知るように計画することが大切であると考えます。

7. 農業体験の実施と今後の展望

平成13、14年度に津山市の農業後継者と農業改良普及センターが主催した農業体験事業に学生と共に参加した。参加者は一般市民を対象とし、19～51歳までの男女19名である。そのうち、学生は4名である。1年目は田植えや乳搾り、加工品作り、様々な専業農家の見学等を行った。2年目は一連の米作りとトマト収穫等を行った(写真1、2)。活動後のアンケートで、この活動を通じて一般市民を含めた参加者の9割が「農業に対するイメージが変わった」と答えており、「農家の楽しさや大変さを感じた」「今後も農業体験を続けたい」「国産農産物を買わないといけないと思った」「他の産業よりも一番大変な仕事だと感じた」等の意見があった。平成15年度は、学生23名を対象に稲刈り、搾乳、果物や野菜の収穫、畜産共進会の見学等を計画している。

今回のアンケート結果から、農作業経験のある人は



(写真1)



(写真2)

農業体験・学習への参加意欲が高いことから、農業体験・学習の実施を続けることは農業、農家への関心を高めることにつながると考えられる。農業に無関心な人、大変だと暗いイメージを持っている人にも農業体験・学習を楽しいと感じさせる啓発の方法や達成感、喜びを感じるような内容の検討を行うことが重要であると考えます。また、家が農家である人においては農業への関心が高くないため、農業従事者と若者とで語り合う機会を設けて、親近感を持つことにより、農業、農産物を身近に感じ、日常生活での食に対する関心につながるような取り組みを行いたいと考えます。

【ま と め】

以上の結果から、次のことが分かった。

1. 家が農家であっても必ずしも農作物を育てた経験があるとは限らず、農作物を育てた経験がある人は

ど農業体験・学習への参加を希望している。

2. 農業体験・学習の参加意欲の高い人ほど、農産物の旬を意識し、「地産地消」の言葉を知っている割合が多い傾向が見られた。食に関しては、食べ残しをする頻度は低いが、農産物の摂食頻度が低く、特にいも類・豆が著しく少なかった。
 3. 学生は、農業について「つらい」、「重労働」の肉体的労働のイメージを抱いている反面、農業従事者よりも「明るい」「開放的」といったイメージを抱いている。また、「生きがいがある」というイメージもある。農業体験・学習への参加意欲の高い人ほど全体的に明るい良いイメージを抱いている。農業従事者は、農業について一般的に言われている「つらい」「暗い」「閉鎖的」といった暗いイメージを抱いているが、仕事に「生きがいがある」と感じている。
 4. 学生と農業従事者に共通して、農産物の「安心・安全性」に対する関心が高い。
 5. 学生は、農業体験・学習を希望する理由として「楽しそう」といった気軽な気持ちが強い。希望しない人は、やはり重労働、家が農家であることから敬遠しており、また無関心である。
 6. 農業従事者は、農業体験・学習を取り組んでみたいと思う人が多く、「農業の楽しさ・良さ」「農産物の生産方法」を教えたいといった理由が多かった。
- 以上のことから、家が農家であるないに関わらず、実際に農作物を育てた経験が農業・農作物の興味・関心度、農作物の食べ方等に影響を及ぼすことから、農業体験・学習を実施することは、農業・農作物に対する意識を高める一つ的手段として有効だと考えられる。さらに、農家でも次世代の若者へ食や農作物についての大切さや重要性をもっと教えることが必要ではないかと考えられる。今後は、農業体験・学習を計画・実施した内容について、その効果を検討していきたいと考える。

【謝 辞】

本調査をするにあたり、ご協力を頂きました津山農業改良

普及センター地域担い手班主任 藤堂洋二氏、津山市農業後継者協議会会長 石岡史好氏、アンケートにご協力を頂きました津山地域の農業従事者の皆様に厚く御礼申し上げます。

【引用文献】

- 1) 原田津「食の原理 農の原理」農山漁村文化協会, 1997, p 12
- 2) 目瀬守男 監修「岡山県農業・農村の活性化」農林統計協会, 1998, p 11, 16~17
- 3) 岸康彦「食と農の戦後史」日本経済新聞社, 1997, p ii
- 4) 健康・栄養情報研究会 編「国民栄養の現状 平成13年厚生労働省国民栄養調査結果」第一出版, 2003, p 46~49
- 5) 江留川洋「子どもの生きる力をはぐくむ (18巻) 生きる基本一食の意味を考える」食べもの通信社, 1999, p 51~52
- 6) 岡山県食の安全推進本部 編「食の安全・安心おかやま」, 2003, p 9
- 7) 沖縄県農林水産企画課「農業関係統計 総括統計表」1998
- 8) 健康・栄養情報研究会 編「国民栄養の現状 平成13年厚生労働省国民栄養調査結果」第一出版, 2003, p 44~45
- 9) 全国栄養士養成施設協会 監修「管理栄養士国家試験受験講座 食品衛生学」第一出版, 2001, p 20~21, 93